

2. 東京 2020 に向けてのパラ水泳日本代表 選手の医療サポート

青木隆明*1, 奥田鉄人*2, 小泉圭介*3
志村圭太*4, 吉沢 剛*5

〔要旨〕 コロナ感染が日本をも巻き込み、東京オリパラも 1 年延期となりました。その間日本代表選考のための準備とともに、練習場の確保とそこでの感染対策に奔走しました。選手の体調管理から感染対策を行うため、障がい者水泳連盟の中に感染対策委員会を立ち上げ、委員のメンバーとともに、練習場での感染対策はもとより日ごろの体調のチェック、感染した場合、濃厚接触者についてなど、マニュアルをつくり選手のサポートを行いました。

●はじめに

コロナ感染が日本をも巻き込み、東京オリパラも 1 年延期となりました。その間日本代表選考のための準備とともに、練習場の確保とそこでの感染対策に奔走しました。選手の体調管理や感染対策への啓蒙を行うため、障がい者水泳連盟の中に感染対策委員会を立ち上げ、委員のメンバーとともに、練習場での感染対策はもとより日ごろの体調のチェック、感染した場合、濃厚接触者となった場合や、国内でのクラス分けを行う際の感染対策などのマニュアル作りを JPC (日本障がい者スポーツ協会) や NTC (ナショナルトレーニングセンター) のものを参考に、手探りの状態が続きました。

●パラ選手の健康管理

日頃、選手・スタッフはアプリ(図 1)に体温・体調などを入力します。アプリは医療スタッフで毎朝確認します。もし体調に変化などある場合連

盟へ連絡し、合宿や遠征の参加の有無を感染委員会で決めます。必要に応じて近医を受診。PCR 検査を受けるよう促しました。検査の結果をもとに判断され、各自に知らせます。幸い陽性者はいませんでした。

●海外遠征

大会記録のためというより、クラス分けのための海外遠征に出かけました。その際には国の要綱に従うとともに、連盟としての感染に対する要綱も作成し、選手・スタッフに徹底しました。イギリス・アメリカともに遠征先によって感染対策や、受け入れは異なることと、イギリスはすでにワクチン接種がすすんでおり、会場のスタッフ、イギリス選手はほとんど接種後でした。そのためイギリスでは空港での PCR 検査(図 2)、移動後ホテルと競技場のみの移動で、食事もホテルでつくられたものを、各自の部屋で食べるようにしました。

当然、マスクとフェイスシールドを選手もスタッフも義務化し、各自消毒も携帯しました。競技場では 1 レースごとにスタート台は消毒され、会場の入り口では、体温チェック、2 週間の体調・体温チェックシートの提出、さらには空港での PCR 検査の報告書を提出しました。

*1 岐阜大学大学院医学系研究科整形外科

*2 金沢星稜大学

*3 東都医療大学

*4 国際医療福祉大学

*5 緑園ゆきひろ整形外科

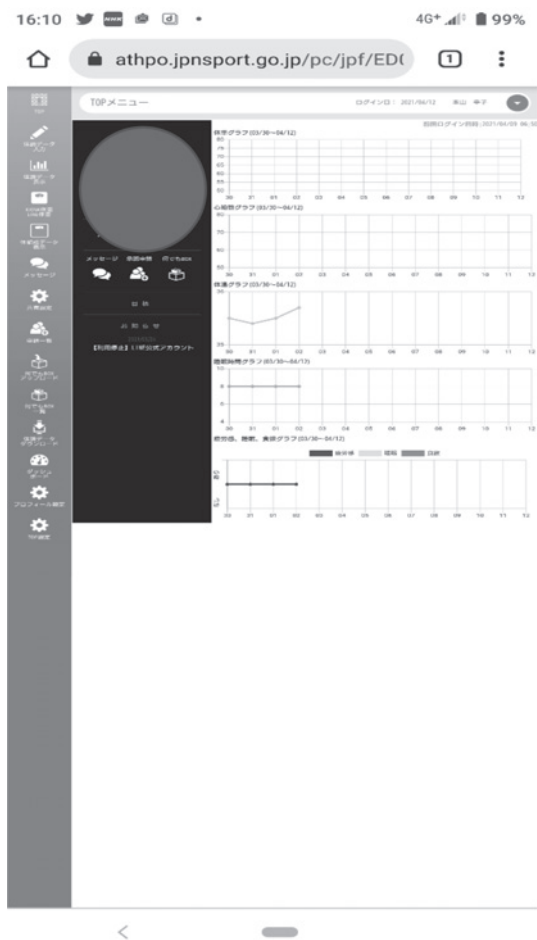


図1 健康チェックアプリ 毎朝入力し、連盟・担当医師で確認する。



図2 イギリス空港でのPCR検査



図3 連盟独自に消毒、検温、SPO₂の計測を行った

●国内の大会

日本でも同様のことを大会では行い、感染対策をするとともに、障がい者選手に対して付き添いも1名までと、できる限り最小限とした。水泳ではスタートの笛を電子ホイッスルとし、他の競技と同様に飛沫が飛ばないように行われた。会場の動線も1方向とすることで、できるだけ選手同士の接触を避けるよう工夫した。また選手に対して介助する者も帽子・マスク・ガウン・手袋を装着し、プールからの入水、出水の介助を行うようにした。

●合宿での対策

合宿先の感染対策に従い、特に利用されたナショナルトレーニングセンターでの感染対策として、体温・体調のチェック、PCR検査を連盟の費用で行い、対応した。更衣室のロッカーも選手が

できるだけ同じロッカーを利用するようにし、スタッフによる消毒をおこなった(図3)。また食事の際などNTCの感染対策に準じて、手袋や透明板によるしきりで各自会話のないように食事をした。

●連盟としての準備

感染対策委員会の設立とともに、スタッフによるコロナ対策の研修を開催することで、情報交換もおこなった。危機管理マニュアルも試行錯誤の上作成し、さらに国内でも行う。クラス分けの際の感染対策マニュアルも作成した。大会に出られなかった際に、東京2020の選考をどうするかについても代替の成績の取り扱いなど、一定のルールを決めた。

競技者にたいして、常に無理をせず、発熱等の症状が少しでもあれば、連盟の指示に従い、参加を見送るなど徹底し、濃厚接触者としての情報を得た場合も待機させ、保健所の指示に従うよう各選手に、情報交換を常にとれるようにした。

●運動機能

代表選考の会議を経て、代表選手が決まり、彼らのワクチン接種の是非を問診し、接種をすすめた。幸いアナフィラキシーなどの問題のある選手はおらず、日本障がい者スポーツ協会によるワクチン接種があり、水泳では全員接種してから本番を迎えることとなりました。

コロナによる練習会場の確保や、練習機会の問題で、運動機能の低下が危惧されるため、専属トレーナーによるトレーニングや計測により、体力筋力の維持に努めた。練習ができなかった選手の

中には1週間で最大14.2%の筋力の低下を認めた。

●クラス分け

クラス分けも感染対策は同様に、クラス分けをする側も介助者と同じガウンなどを装着。ベッドや計測道具も各回で消毒し、必ず、記録者と計測者の2名で行い、できるだけ接触を避けるようにすすめられた。

●まとめ

東京2020を迎えるために延期された1年間、試行錯誤の上準備をすすめ、本番をむかえることができた。感染対策や、コロナへの対応でわからない点も多い中、オンラインで何度か研修も行い、1つの良い経験となったと思う。